

『印賀鋼』を知っていますか？

出 雲地方は、全国でも有数の「たたら製鉄」の地として有名です。日野川周辺でも、砂鉄等をつかい、流域の各地で「たたら製鉄」が盛んでした。日野川の上流に位置する日南町もその一つ。かつては『印賀鋼』というブランドで、日本一の品質を誇る鋼を産出していたのです。

今回の特集は、日南町在住の山本裕二さんがまとめられた『改正 日南町の近代のたたら製鉄と和鐵』より、現在では「幻」となってしまった『印賀鋼』について、ご紹介します。



礪波鑪の印賀鋼

幻の逸品『印賀鋼』

日 南町史によると、文化6年(1809)に、青砥孫左衛門氏が『印賀鋼』の商標で、地元産の鋼を売り出したのが取引の始まりと言われています。『印賀鋼』は、印賀・礪波(礪波)、阿毘縁等で産出された純粋な日南町産砂鉄だけを使用しているのが特徴。『出雲鋼』で使われている出雲地方産の砂鉄を使っていません。当時より、その優秀な品質さが評価を受け、市場でも“日本一の鋼”として取引されていたそうです。



『印賀鋼』のふるさと

日 南町内には、「吉鑪」と「礪波鑪」という二つのたたら場がありました。いずれも大正時代後期には閉鎖されています。

特に、「吉鑪」は、優秀な鋼の品質にとって重要な、釜土と砂鉄の品質、そして技術者である村下の技術が最高と言われ、優秀な品質の『印賀鋼』を製造していました。製品は馬を使い、峠を越えて安来や米子に出荷されていたそうです。

一方の「礪波鑪」も優秀な品質の『印賀鋼』が製造されていましたが、詳細は今に残されていません。

これらの他にも、当時は、日野川源流に近い野富、正土原、杉谷、土屋にもたたらがあったとされ、また現在でも町内には銑鉄の製造を行う角炉の跡や、鉄の神様をまつる金屋子さんやたたら地蔵などが残っています。



吉鑪の印賀鋼

印賀多々良うた

ここは、印賀の吉鑪
釜土よいか、村下がよいか
ほんによい鑪、吉鑪
印賀の鑪は日本一

ここは、印賀の吉鑪
サゲよいか、大工がよいか
ほんによい鑪、吉鑪
印賀の鑪は、日本一

ここは、印賀の吉鑪
小鉄よいか、村下がよいか
ほんによい鋼、印賀鋼
印賀の鋼は日本一

作：山本裕二



印賀鋼の故郷 吉鑪
名刀に今も残る『印賀鋼』

“ **日** 本一の鋼・印賀鋼 ” は、その高い品質に、日本刀製造を行う刀匠たちにも熱い注目を集めていました。

大正後期にたたらが閉鎖された後は、たたらを経営していた家やたたら場等で大切に残されたものを譲り受けられ、まさに数少ない幻の逸品として使われていたそうです。『印賀鋼』で作った日本刀は、「吉鑪」製は抜群の切れ味を誇り、「礪波鑪」製は「青みがかった深い淵の色」の鉄色(かないろ)の冴えと粘りが特徴だったと伝えられています。

印賀鋼で鍛えられた日本刀は、「文部大臣賞」をはじめそのほとんどが全国有数の賞を受賞しています。その仕上がりの見事さには、それを目にした専門家が口々に驚嘆しています。

そして今、その魅力を今に残そうと、『印賀鋼』を自らの手で造りたいという人も現れています。

かつて、日本一の品質を誇った『印賀鋼』。日野川の源流のまち日南町から、そして日野川の砂鉄から全国へ、世界に発信できる品質の鋼が生み出されていたのです。

注1 釜土(粘土)
築炉用の粘土は、花崗岩の風化したもので珪酸(SiO₂)が適量で適度な耐火性と不純物も少ないことが条件であったため、苦心して選ばれていました。

注2 村下
村下の役割は、たたら製鉄における技術監督とも総責任者、炉の準備の指揮から始まり、砂鉄や木炭を炉に入れる作業などを行います。よい鋼ができるかどうかは、村下の腕ひとつにかかっていました。

注3 金屋子さん
金屋子神社に祭られている『金屋子(かなやご)』という製鉄や鍛冶の神さま
金屋子神がかかわると、質のすぐれた鉄が産みだされるという金屋子神に対する信仰が、たたらで働く人たちのあいだにひろまっていた。